

3歳児の保育に見る10の姿の芽生え

～写真を生かした記録から～

柳原希未・山口舞・日下部弘美（日本女子大学附属豊明幼稚園）・請川滋大（日本女子大学）

【はじめに】（請川）

日本女子大学附属豊明幼稚園の園内研に関わって4年目となる。その間、他園の実践などを参考にしながら、豊明幼稚園の実践がより良いものになるよう意識をして園内研を進めてきたつもりである。2017年、本学会の第8回大会（於：札幌大谷大学短期大学部）において「保育実践に生かすドキュメンテーション」として研究発表を行った。ドキュメンテーション作成を始めて2年目の年だったが、ドキュメンテーション作成を通して見落としがちであった子どもの生き生きとした姿が見えてきた半面、一方では写真の処理をどうするか、どういった場面を取り上げたらよいかなど新たな課題も見えてきた研究であった。その際、フロアから「どうやってドキュメンテーションを作成する時間を捻出しているのか」などの質問があり、それは現在の「ノンコンタクト・タイムの確保」という保育業界全体に関わる大きな問題であるということを改めて気づかされた。

今年の発表では、本園で「日の記録」と呼ぶ毎日の記録として作成されるドキュメンテーションについて触れ、それらをどのように作成し、どう活用しているのか山口教諭が報告する。同じ学年を担当する担任同士が「日の記録」を通して語りを進めているが、具体的なエピソードを通した記録があるからこそ生まれる語りがあることが分かる。さらに、2017年の幼稚園教育要領改訂で示された「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」（10の姿）が「日の記録」の中でどう見られたかについて、柳原教諭より報告したい。3歳児の姿を「10の姿」で捉えるのは難しい側面もあるが、しかし3歳児でもしっかりとその芽と見られるようなやりとりをしている様子が垣間見える。まだ研究の途上であるが、ぜひ多くの方々からご意見を頂ければと考えている。

【日本女子大学附属豊明幼稚園について】（日下部）

本園は「遊びを中心とした保育」「感性をはぐくむ保育」を大切にし、創立110周年を迎えた。幼稚園教育要領の改訂に伴い、一貫教育の始まりである園として、創立者が提唱した3綱領を伝統として受け継ぎながらも、いかに新しい流れを取り入れていくか模索している。

2016年度から保育の振り返りとしてドキュメンテーションを導入したことにより、幼稚園内に語り合える風土が徐々に培われてきており、対話を通して子どもの育ちのみどりに深まりが出てきている。今回は日々の営みから見えてきたことをお話をしたい。

【記録を通して生まれる保育者間の語り合い】

（山口）

＜日の記録の作成＞

・日の記録としてのドキュメンテーション

日の記録として、1日につきA4で1枚ドキュメンテーションを作成している。エピソードのみならず、子どもの育ち、今後の展開の予想、明日の援助を省察するようにしている。それらの過程の中で、自分の思考が整理されるとともに、子どもの興味に気づいたり、遊びの連続性も見えたりしていった。常に教育課程や「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」等にも立ち返るよう心掛けといった。

・2人担任で作成する日の記録

日の記録としてのドキュメンテーションを作り始めて以降、初めて2人担任となった。そのため、1人ではなく2人で作るドキュメンテーションの形を探っていくこととなった。

初めはA4で1人1枚ずつ作成していたが、時間が掛かってしまった。時間を短縮できるよう、担任間で日の振り返りを話し合った後、1人が作成を行うようにした。もしくは1枚の中でそれぞれが関わった部分を書き、2人で1枚を作成するようにした。このような方法で、記録を作りながらも他の仕事が進めていけるようにしていった。

・日の記録の活用

日の記録で作成したドキュメンテーションの内容は、週案、保護者向けの掲示としてのドキュメンテーション、個人のポートフォリオにも生かせる部分があれば活用していくようにした。

＜日の記録から生まれる語り合い＞

・保育者間での情報共有ツール

日の記録により、担任間での語り合いが増えた。また、クラスで作成した記録は翌日の保育が始まる前に、学年間でも見合うようにした。担任間（2人）だけでなく、学年間（6人）でも共有して、感じたことや気づいたことを伝え合うようにしていった。

・翌日の保育に生かす視点

保育者間の話し合いで、情報を共有しながら育ちに着目し、翌日の保育に生かせることを中心に行うよう心掛けた。そのため他者にも伝わりやすいように、文章が多すぎたり、その日見聞きしたこと全てを載せたりするのではなく、整理して作成するようにしていった。また、遊びの様子と育ちを書いた上で、翌日以降の保育をどのように展開しようとを考えているのかという「NEXT」をわかりやすく括りだすようにした。記録を見合う中で具体的な場の作り方や教材の準備など、環境構成を提案し合ったり、一人では気づかなかつたような視点や発想が生まれたりすることに繋がっていったと感じられる。

【記録からみる幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿の芽生え】 (柳原)

＜事例1 型抜きに挑戦（3歳児クラス9月）＞

新しい型抜きに興味津々のA児。乾いた砂を入れるとさらさらと零れ落ちてしまう。入れては零れ落ち崩れることを繰り返していた。

翌日は、前日の雨で砂が湿っていたことが功を奏し、砂をきゅきゅっと力強く詰めていくときれいに型抜きができた。それを伝えようと保育者を呼びに来ていた。その後何日も続けて挑戦する中で、自分なりに力を入れて砂を詰めていくとよいということに気づいていった。「こうやってやるんだよ」と友だちにコツを伝えようとしていた。

【考察】

モノと対話するA児の姿からは『自立心』や『自然とのかかわり』、『思考力の芽生え』を感じた。また友だちに『言葉で伝えよう』とし、遊びが広がっていた。このような姿は10の姿につながるものではないか、3歳児からその姿の芽生えが始まっているのではないか、この事例を通して気づき、その後の子どもたちへのかかわりや子どもの姿の読み取りへもつながっていった。

＜事例2 砂場で山作り（3歳児クラス11月）＞

1日目 B児たちが始めた山作り。C児は「水をかけた方が硬くなる」と言ったことで、水をかけながら山を作り始める。

2日目 翌日は水をかけ叩いて固める中で、D児が足で踏みつけ崩れる場面もあった。B児が怒るが、固める為だとわかると一緒に作り進める。

3日目 年長児が硬くなる方法として白砂をかけに来る。落ち葉で飾り付けや水で模様付けを始める。水で模様を描くがしばらくすると消えてしまうことに気づき、途中でやめる姿も見られた。

4日目 白砂を自分たちでもかけ始め、水と交互に固めていた。声を掛け合い、バケツがなくその中で一番大きいと思われる容器を探し運んでいた。隣で年中組が小さな山にトンネルを開けているのを見て、トンネル作りが始まった。

5日目 3方向から掘り進め開通する。

6日目 トンネルが崩れてしまう。原因を考える子どもたち。前回の経験から土台を丈夫にしようと、下から踏み固める姿が見られた。

【考察】 事例2からみる10の姿の芽生え

・自立心

自分で考え行動する姿が見られている。友だちの刺激を受け参加している子どももいる。その中で自分が山を作る中でどのようなことをしたらよいか考え取り組んでいた。

・自然とのかかわり

砂と触れ合う中で、その感触を楽しむだけではなく、水や砂の性質も感じながら遊んでいる。山が硬

くなる様子、水が吸い込まれる様子や乾く様子を、遊びが続く中で体感していた。

・思考力の芽生え

高くするにはどうしたらよいか、初めはひたすらに砂をかけるだけであったが、その途中で様々な材料や方法を友だちや異年齢のかかわりを通して、学び実践していった。

・言葉による伝え合い

メンバーは入れ替わるが、言葉で伝え合うことで、遊びや様々な方法が続いていった。急に水をかける、足で踏むことで初めは誤解を生みトラブルにも発展しかねたが、山を高くするためにはやっていることを伝え合いながら遊びを進めようとしていた。うまく伝えられない時には保育者が促していったが、話を聞き相手を受け入れることで、遊びが続いていき、協同性にもつながっていった。

・協同性

山を高くするという共通の目的が明確であったことや、実際に高くなってきた実感が伴い、一緒に行う意欲へと結びついた。1学期の経験を生かし、水を運んだり、山を固めたりと役割分担し始める。その場の雰囲気を感じ自然と役割を決める子どもや声をかけて手伝いを求める子どもも見られた。

・数量への関心・感覚

砂場では多くの子どもが遊んでおり、道具がないこともある。その時に小さなカップで運んでいる友だちを見て、それよりも大きい漏斗を選んだB児。穴は手で押さえながら水を運んでいた。

・豊かな感性と表現

落ち葉で飾ったり、丸い円で跡を付け模様にしたり、高くするだけではなく、きれいに見せたいということから飾り付けをしていた。水で模様を付ける中でその面白さやはかなさを感じていた。

＜3歳児の姿と保育者のかかわりについて＞

10の姿の芽生えが上記の事例から見られた。またこれらの要素は互いに影響しつつ、つながっていることにも改めて気づいた。

事例1をきっかけに保育者は子どもたちの気づきや試行錯誤を大切にしたいと思い、待つことを心掛けた。すると面白い発見や子どもなりに考えている姿に出会った。3歳児は言葉でうまく伝えられない分、その姿から保育者が見とりながら、うまくいかないことが続いた際には、気持ちを支えることが必要である。どこまで待つかは時期や個々に応じて異なり難しいが、そのような保育者のかかわりも子どもたちの育ちに必要なことであると感じた。

また、その際に5歳児になってから幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿を意識するのではなく3歳児からその姿に気づき、保育をしていきたいと考える。このような気づきにいたったのも、教員間の語り合いを大切にしてきたからである。対話することで、皆で個々の育ちを共有し、一人ひとりを温かいまなざしで見守っていった。このような語り合いの機会を今後も大切にしていきたい。